

市川健夫先生を送る

青木栄一

市川健夫先生が東京学芸大学地理学教室のスタッフとして着任されたのは1973年4月であった。東京学芸大学が新制大学として発足してから四半世紀にわたり、地理学教室のスタッフは停年退官される方はおられても、新任教官は助手人事を除けば皆無であったから、教室に大きな新風を吹きこんだであろうことは想像にかたくない。市川先生の着任は地理学教室にとって一つの新しい時代のはじまりであったといえよう。先生は東京学芸大学地理学教室のよき伝統を継承しつつも、また新しい教室の理念と学風の確立に努力してこられた。

市川先生はフィールドワークの達人であり、地理学者になるために生まれてきたような人であった。1948年、東京高等師範学校を卒業されて以来、生国信州を舞台として農山村地域の研究を続けられ、1965年に学位論文「日本の中央高地における高冷地農業の諸類型」によって、東京教育大学より理学博士の学位を授与された（主査：青野寿郎先生）。

市川先生の手がけてこられた研究分野はまことに多岐にわたり、その視点は風土と文化を中心とした総合的なものであった。信州の農山村にはじまった研究は1970年代後半に入ると日本全国に及び、さらにモンゴルや中国の新疆省、雲南省と拡大するとともに、研究の主題も高冷地農業から、サケ、馬と牛、ブナ帯、青潮といったオリジナリティ豊かな領域を次々と創造された。とくに「ブナ帯文化」と「青潮文化」は市川先生御自身による命名であり、地理学界はもとより、一般社会にも

大きくアピールしたネーミングであった。一人一人の研究者の学問領域が専門性を深めるとともに次第にその研究範囲をせまく、せまく絞ってゆく傾向にあるなかで、先生は広い視野で総合的な考察を主張され、実践されてきた。それは正に現代の地理学が目指すべき大道の一つであるといえる。

膨大な著作目録からもわかるように、市川先生の著作活動は日本の地理学界では数的に群を抜いた存在である。学術雑誌に深淵な研究論文を発表されるだけでなく、一般の人々も関心をもつテーマをとりあげて、多くの啓蒙書を上梓してこられた。それは正に地理学の真髄と面白さを社会一般に広く伝える伝道師の姿であった。

私事にわたって恐縮であるが、私が市川先生にはじめてお会いしたのは、1962年、私がまだ大学院生であったときのことであった。八ヶ岳地域の観光開発をテーマとした数日にわたる調査にご一緒して、その博識と適確な指摘には驚嘆した。これを契機として以後いろいろと御指導いただくようになり、学位も市川先生と同日付けで授与されるというのも奇偶であった。そして最終的には先生と同じ大学に勤務することになり、先生が停年で退官されるに際して送別の辞を書くことになったのもご縁が深かったのであろう。

長い間の先生とおつきあいを通じて感じたことは、地理学の面白さとむずかしさである。信州に生まれ、信州で育った先生は、信州の農山村の風土と文化のなかに骨の髄までどっぷりとつかってこられた。豊富な調査経

験と鋭い観察力とによって、信州の、いや現在では東アジア全域にわたる農山村について、すみずみまで知りつくし、その体系的、総合的な知識を駆使して数々の著書や論文をまとめられてきた。しかし、さまざまな学問分野にわたる広い教養をもち、さまざまな視点を総合したかたちで地域現象を分析するということは決して簡単なことではなく、正に先生ならではの感を深くする。地理学の大きな目標の一つは地誌学にあるといわれるが、地誌学の真髄は市川先生のような人によってはじめて到達できるのではないかと感ずることが

ある。先生のお好きな言葉である「風土と文化」とは、総合的な視点に立つ地誌をつくる大黒柱のようなものであり、このような学問的風土を東京学芸大学地理学教室の伝統のなかに植えつけて下さったことは何よりもうれしいことである。

御退官後の先生は、郷里の信州に帰られ、県の文化を支える要職に就かれると聞いている。ますますお元気で研究を続けられ、地理学の振興と普及にご尽力下されることをお願いして、送別の辞にかえたい。

1991年2月